

「通信制高等学校における新学習指導要領への取組」(全通研北海道大会 第1分科会本部発表)

- ー 主体的・対話的で深い学びの実現を目指す
総合的な探究の時間の実現に向けて ー

神奈川県立横浜修悠館高等学校

副校長 塚 越 幸 雄

群馬県立前橋清陵高等学校

教頭 天 田 徹 也

千葉県立千葉大宮高等学校

教頭 佐々木 浩 幸

埼玉県立大宮中央高等学校

教頭 上 田 毅 一

目黒日本大学高等学校

部長 原 田 啓 嗣

1 はじめに

21 世紀の社会は知識基盤社会といわれている。新しい知識や技術の変化の早さが加速度的になり、加えて世界的な新型コロナウイルス感染症拡大の影響により情報化やグローバル化といった社会的変化が人間の予想を超えて進展する時代となっている。特に進化した人工知能が社会や生活を大きく変える Society5.0 といわれる時代の到来が予測されているが、学校教育には子供たち一人一人の新しい時代を生き抜く力の育成が求められている。

このような背景の中、9 年ぶりに学習指導要領が全面改訂され、平成 30 年 3 月に告示された。令和 4 年度より実施される新しい学習指導要領では、各学校の教育目標を明確化するとともに、社会に開かれた教育課程の編成に努めることが求められている。また、各学校においては、学校教育目標を達成するための「カリキュラム・マネジメント」の実現が課題となっている。そこで、新学習指導要領への対応の現状について各校の工夫や課題をアンケート調査するとともに、平成 31 年度入学生より先行実施されている「総合的な探究の時間」への取組について、「総合的な学習の時間」の実績・課題を振り返りつつ、情報を共有したいと考えた。

さらに、教科横断的な探究課題や組織的・効率的な運営などに、先んじて取り組んでいる学校の例を紹介することで、各校に参考になる情報を提供したい。

2 アンケート調査について

(1) 調査項目の作成

令和元年 12 月にアンケートを作成した。主な調査項目は

◎新学習指導要領への取組状況

◎総合的な学習の時間の振り返り

◎総合的な探究の時間への取組状況

の 3 点とした。

(2) 調査を実施した時期と方法

令和元年 12 月末にアンケート調査を実施した。全通研に加盟する 118 校に、各地区通研を通じて電子メールにてファイルを送信し、102 校(86.4%)から回答を得た。

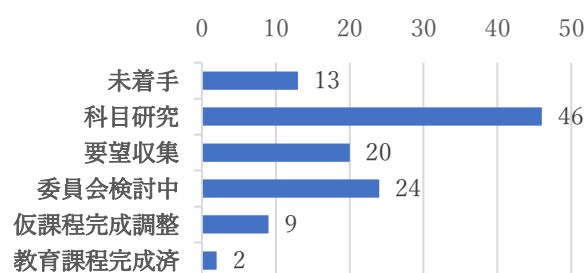
3 会員校におけるアンケート回答から

(グラフの数値は、全て校数)

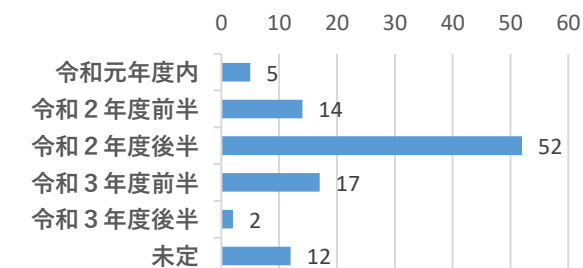
◎「新学習指導要領」への取組状況

I 教育課程編成について

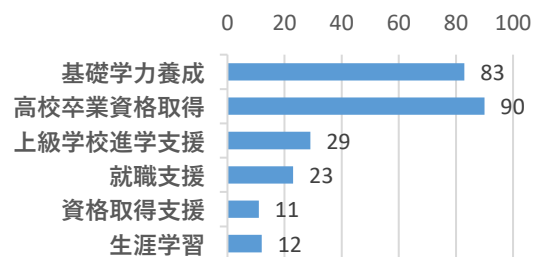
Q1 教育課程編成の進捗状況(複数回答あり)



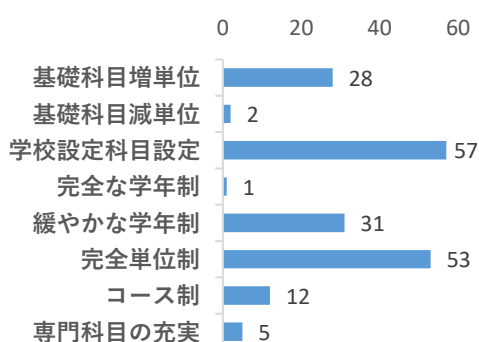
Q2 完成予定時期



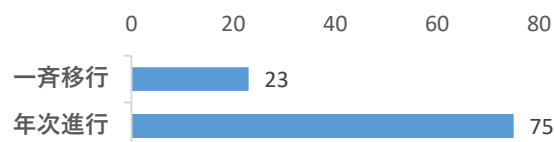
Q3 編成上のコンセプト（複数回答可）



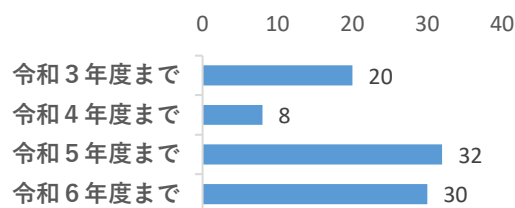
Q4 編成上の工夫（複数回答可）



Q5 移行方法（未回答4）



Q6 現課程科目開講期間（未回答12）

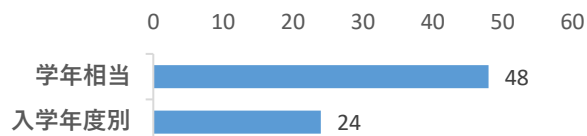


Q7 現課程科目終了後も残留している生徒に関して、どのように対応しますか

現在検討中の学校も若干見られたが、ほとんどの学校で新課程科目を履修させ、旧課程科目として読み替えを行って対応予定である。

また、各教育委員会から指示の出ている学校や、オリジナルの通信講座で別途対応する学校もある。いずれにせよ、生徒に不利にならない対応を取ることが望まれる。

Q8 クラス分け方法（未回答30）

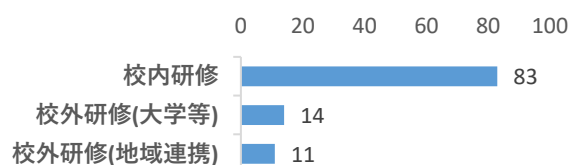


Q9 その他、教育課程編成上の工夫・課題

- ・学び直しや基礎基本といった内容を重視する。
- ・必須科目をすべて2年次までに履修できるように編成する。
- ・可能な限り科目数を増やして選択の幅を広げたい。

Ⅱ「主体的・対話的で深い学び」の工夫について

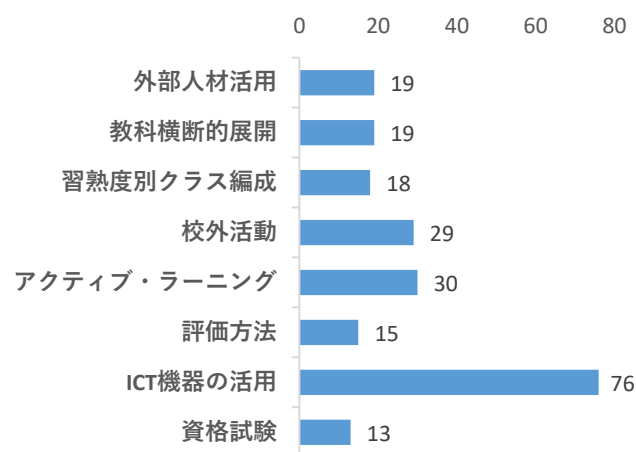
Q1 教員の資質向上のための研修（複数回答可）



Q2 上記Q1のうち、成果が顕著であった研修の具体例

- ・アクティブラーニングの手法（ジグソー法）。
- ・授業公開、研究授業。
- ・外部講師による研修。

Q3 面接指導での工夫（複数回答可）



Q4 報告課題・添削指導の工夫

- ・報告課題の中に「学習の感想・反省・質問」欄を入れ、生徒に記入させている
- ・レポート作成における、ユニバーサルデザインコンセプトを導入。

Q5 その他、新学習指導要領への対応への工夫・課題

- ・報告課題や定期試験の出題内容においても「主体的・対話的で深い学び」を表現し評価していく。
- ・学び直しの科目を生徒の状況を踏まえて習熟度別に設定する。
- ・学校の教育目標を基に学校の「グランドデザイン」を作成する。
- ・ICT 機器を活用した授業づくり。

◎「総合的な学習の時間」の振り返り

平成12年度から始まった「総合的な学習の時間」が、平成31年度から段階的に「総合的な探究の時間」に移行することが決まり、通信制高校におけるその総括を行った上で、成果と課題を「総合的な探究の時間」につなげたいと考えた。

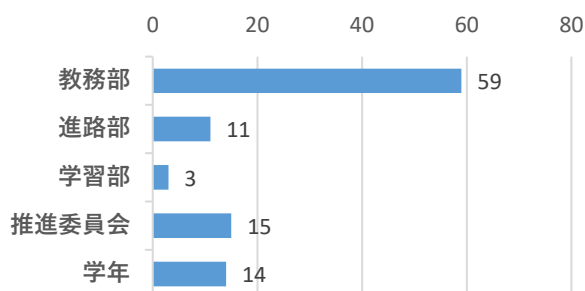
○アンケート調査により、「総合的な学習の時間」の実施状況を把握し、多様な生徒に対し興味・関心を高めた課題設定の工夫等について事例を収集する。

○平成18年度全通研宮城大会第1分科会での研究発表「通信制高等学校の現状と課題への取り組みについて～総合的な学習の時間の運用を通して～」との比較による実施状況の変化、改善等について考察する。

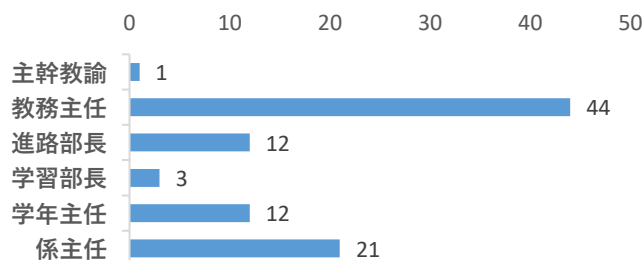
なお、記述式設問については回答を抜粋した。

I 「総合的な学習の時間」の組織

Q1 中核となる組織（校務分掌上の位置づけ）



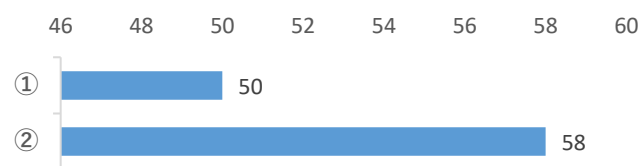
Q2 中心となる先生の役職（未回答9）



II 「総合的な学習の時間」の位置づけ

Q1 「総合的な学習の時間」のねらい（複数回答あり）

- ①自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- ②学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにすること。
- ③その他

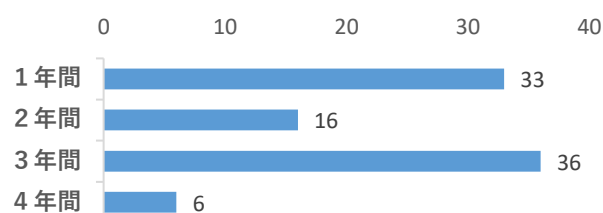


Q2 実施年次及び設定単位

実施年次では、1～3年が36校で40%を占めている。その他の学年での実施については、各校ばらつきが見られた。1年3校、2年5校、3年10校、4年4校、1・2年8校、1・3年2校、2・3年7校、3・4年4校、1～4年7校、2～4年5校となっている。

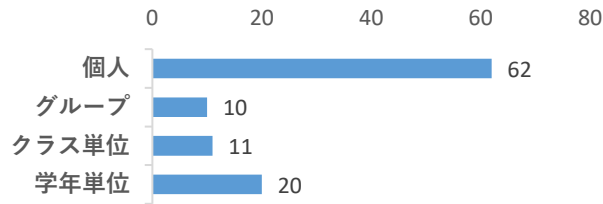
また、設定単位では、3単位が64校、4単位が13校、5単位が3校、6単位が6校、3～5単位が1校、3～6単位が6校となっている。3単位と4単位を合わせると83%を占めている。

Q3 履修させる期間（未回答11）

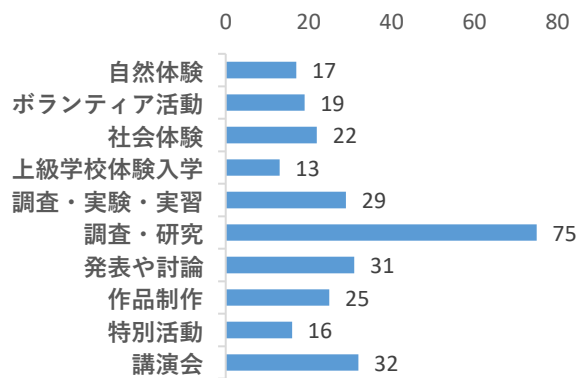


Ⅲ「総合的な学習の時間」の指導計画及び実施状況

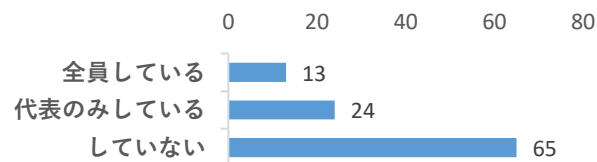
Q1 学習形態（複数回答あり）



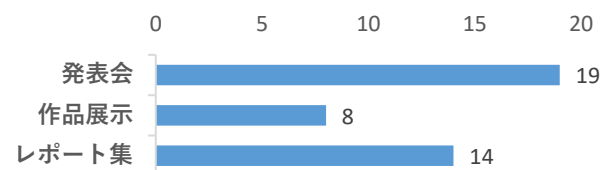
Q2 学習内容（複数回答可）



Q3 成果発表



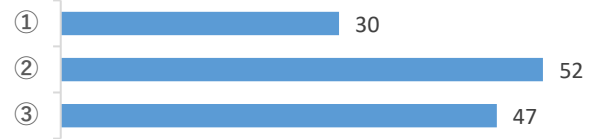
Q4 発表形式（複数回答あり）



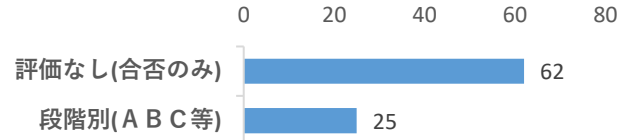
Q5 学習活動（複数回答可）

- ①国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動
- ②生徒が興味・関心、進路等に応じて設定した課題について、知識や技能の進化、総合化を図る学習活動
- ③自己の在り方生き方や進路について考察する学習活動

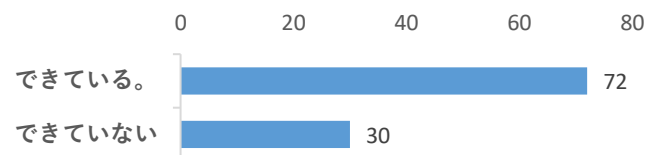
0 10 20 30 40 50 60



Q6 評価（未回答15）



Q7 目標達成



①できている「ねらい達成のために工夫していること、特別に取り組んでいること」

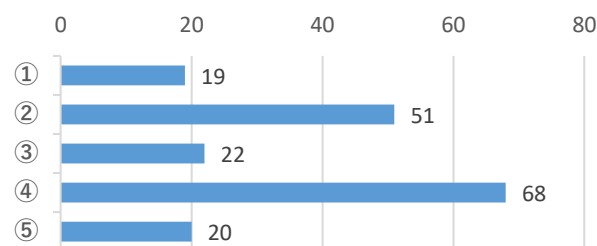
- ・ワークショップ後に振り返りレポートを書かせ、何を学んだか明瞭になるようにする。（仙台白百合学園）
- ・達成困難な生徒に対してレポート完成講座やトライ教室という形での全校をあげての補習実施。（横浜修悠館）
- ・身近な自然や文化・芸術に接することにより自分の問題としての課題を見つけられるように、現地に出向いて調査活動を行うなどしている。（県内の史跡等を訪れて、郷土の歴史・文化を体感する。）（雄峰）
- ・地域での探究活動に取り組み、文化発表会で代表者（複数）がパワーポイントで発表する。（松本筑摩）
- ・講演や体験の時間による学校外の専門家との連携。（北星、高松）
- ・高校の教育活動全体の中に位置付け、他の教科指導、特別活動との関連の中で、その目標達成をしている。（日本ウェルネス）
- ・多様な講座、体験等をスクーリングで用意するだけでなく、キャリアガイダンス・プランニング講座を実施することで、生徒が自らの進路を考え、主体的に判断し、より良い将来を考える環境を整えている。（博多青松）

②できていない「どのような点が未達成か」

- 課題解決の方法が、調べ学習のみで終了してしまい、考察するまでに至っていない。(宇都宮)
- 発表活動の充実。(一橋)
- 各生徒の調査内容を、生徒間で十分に共有することができない。(NHK学園)
- 協働で行うことに抵抗感を持っている生徒にはハードルが高い。(松本筑摩)
- 基本的に、自らテーマを設定し、調べ学習を行い、その成果をレポートとして提出させているが、調べ学習が不十分な生徒に対して効果的な指導ができていない。(自宅にスマホやパソコンがない、家族で図書館や博物館などの施設を一度も利用した経験がない等、どのように調べ学習をしているのかわからない生徒が多く在籍している。そのような生徒に対して、効果的な指導ができない。交通費等の関係で、生徒がなかなか出校できない場合、こちらから学校に呼ぶわけにもいかず、電話で指示するのみで、お互いに歯がゆい思いを抱いている状況である。)(静岡中央)
- 個人差がある。未達成の生徒の特徴はWEBの記述をそのまま写しただけで探究の跡がうかがえない。(松阪)
- 単位を取るために安易な課題設定が見られる。(桃谷)
- 年間実施回数が少ないので、深い学習がなかなかできない。(奈良女子)
- さまざまな経験や体験が少ない生徒が多く、自ら課題を見つけることが不十分な生徒が多かった。(浜田)
- 自宅で新聞購読をしていない家庭も多く、テーマに関する様々な意見や情報を収集する手段が限られる生徒もいる。(佐賀北)

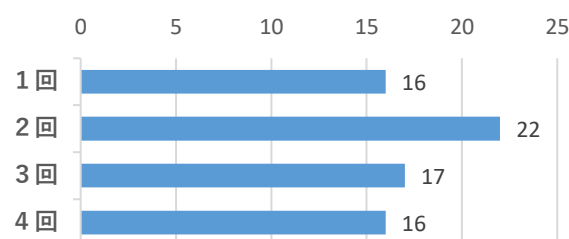
Q8 「総合的な学習の時間」実施上の課題となっている項目を下記から選んでください(複数回答可)

- ①自校の課題を焦点化したカリキュラムづくりについて
- ②教師の指導体制、生徒の支援体制について
- ③自然体験・社会体験等、体験活動をどのように実施するかについて
- ④生徒の興味・関心を高める課題設定と学習の進め方について
- ⑤総合的な学習の時間の評価方法の開発について

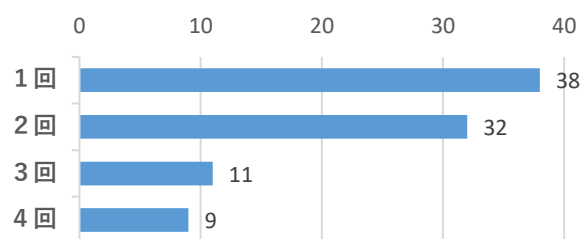


IV「総合的な学習の時間」の面接指導(スクーリング)

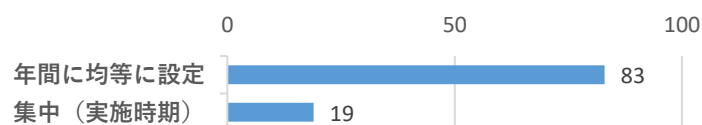
Q1 面接指導の設定回数(1単位につき)(未回答31)



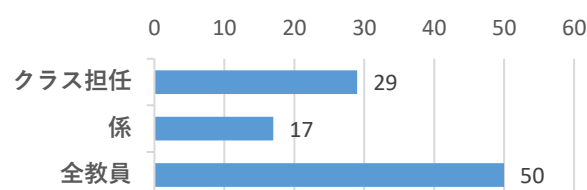
Q2 最低出席時数(1単位につき)(未回答12)



Q3 面接指導を設定する時期

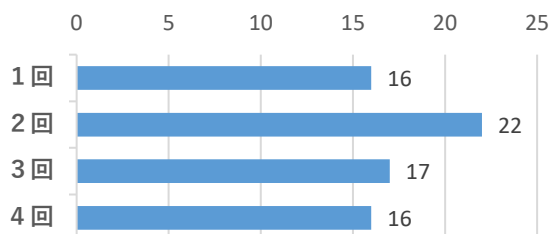


Q4 面接指導担当者(未回答6)



V「総合的な学習の時間」の報告課題・添削指導（レポート）

Q1 報告課題の本数（1単位につき）（未回答31）

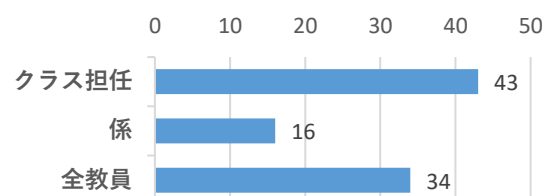


Q2 報告課題の様式

- 自己の在り方・生き方を見つめるためのレポートを提出し、ポートフォリオを作成する。（杜陵）
- 総学1は重要事項のまとめ。総学2は計画書、中間報告書及び報告書。（美田園）
- 1本目は、課題に取り組みやすいよう目的や取組の方法などを項目立てして、各項目について文章でまとめる。2本目も項目立てに従い、成果をまとめた報告書に資料や作品を添える。（宇都宮）
- 複数のテーマから生徒が1つを選択し、計画を立て調査内容を報告する。（NHK学園）
- レポート1では自らの課題を発見する力を育み、レポート2では課題の解決に取り組む。（横浜修悠館）
- 計画書、体験写真、調査報告、体験報告、まとめ等。（桃谷）
- ポスター発表（大人の絵日記）、作文等。（西舞鶴）
- テーマの記入、情報や資料の収集方法と参考文献の記入のあと、本文を記入する。本文は、「動機と目的」、「経過と結果」、「考察と見解」の3項目について、1000字～1200字程度にまとめる。（徳島中央）
- 学習の進め方から入り、各自資料集め、体験学習、まとめ、発表という流れを9回のA4サイズの報告課題に作成する。（丸亀）
- 解決手段と報告書の提出。（高松中央）
- 各年次に、提出回数ごとにテーマを与えて作文を作成させる。（禅林学園）
- ①本校での学習ルールの確認
②全国大会・県大会へと続く生徒生活体験発表用の作文
③進路を主体的に把握するための状況把握、自己理解。（博多青松）

- 講話メモ、講話を聞いて興味を持ったことについて調べた内容に関するレポート、考えたこと、今後実践したいことを報告する。（宜野湾）

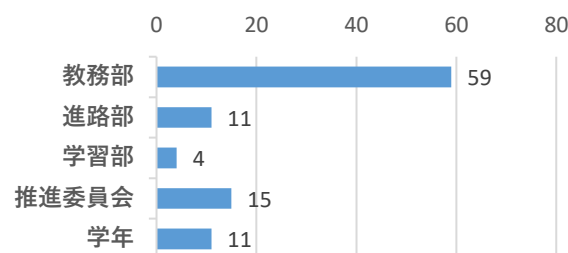
Q3 添削担当者（未回答9）



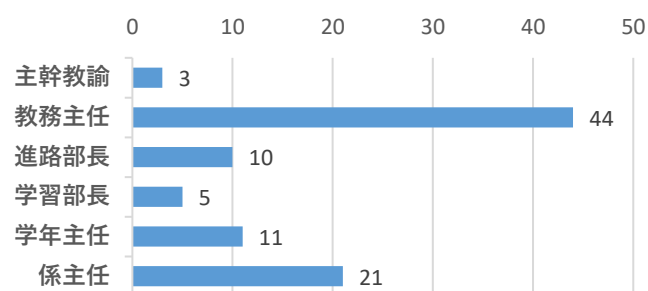
◎「総合的な探究の時間」への取組

I「総合的な探究の時間」の組織

Q1 中核となる組織（校務分掌上の位置づけ）（未回答2）



Q2 中心となる先生の役職（未回答8）



II「総合的な探究の時間」の位置づけ

Q1 貴校の「総合的な探究の時間」の目標

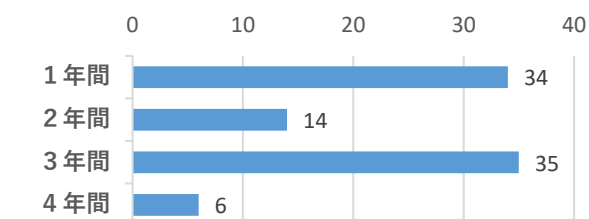
各校の「総合的な探究の時間」の目標には

- 主体的な探究活動
- 存り方生き方を考える
- 思考力、判断力、表現力、コミュニケーション能力、課題解決能力の育成等を記載している学校が多く見受けられた。

Q2 実施年次及び設定単位

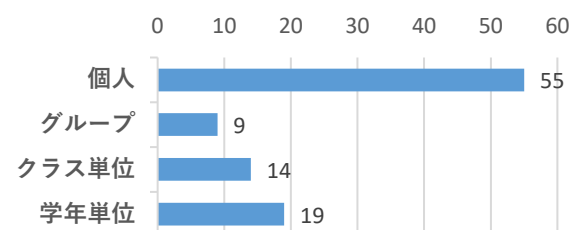
年次（単位数）				校数
1年次	2年次	3年次	4年次	
1	1	1		25
		3		5
2	2	2		4
1	1	1	1	4
	1	2		2
		4		2
			3	2
1	2			2
	3			2
2	2			2
2	2	1		2
1		2		1
1	2	1		1
	2	2		1
2	1			1
3				1
	1	1	1	1
	4			1
	2	1		1
1	2	3		1
4				1

Q3 教育課程上 履修させる期間（未回答13）

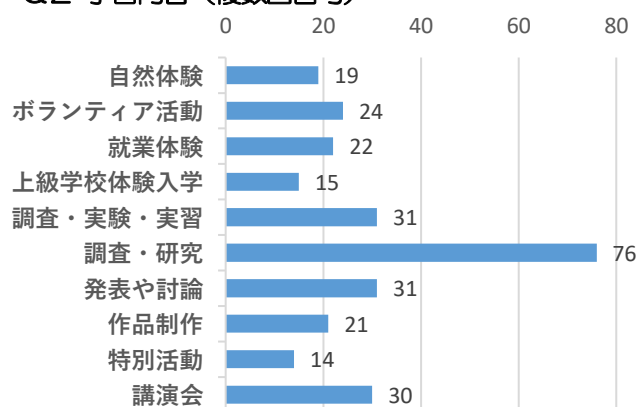


Ⅲ「総合的な探究の時間」の指導計画

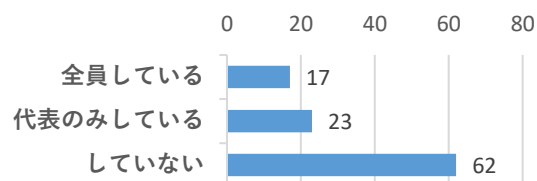
Q1 学習形態（未回答5）



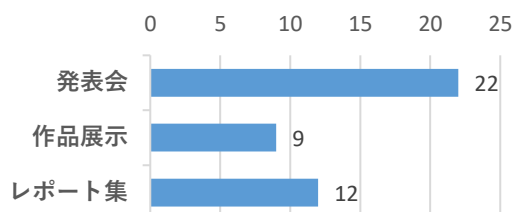
Q2 学習内容（複数回答可）



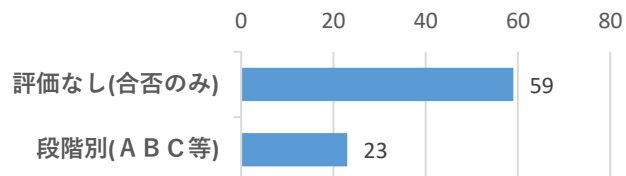
Q3 成果発表



Q4 発表形式（複数回答あり）



Q5 評価（未回答20）

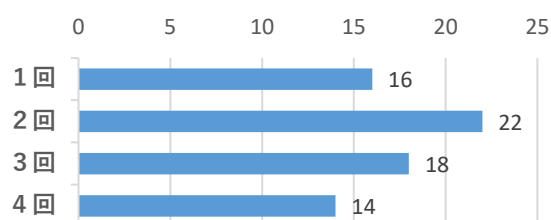


Q6 その他、学習に関する工夫・課題

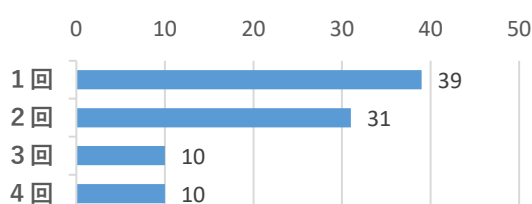
- ・ビックデータの活用。（北斗）
- ・ペアワークやグループディスカッションの導入。（杜陵）
- ・生徒の実態に合わせた適切な難易度の設定。（横浜修悠館、静岡中央）
- ・NHK高校講座の活用。（桃谷）
- ・外部講師の選定。（泊）

IV「総合的な探究の時間」の面接指導（スクリーニング）

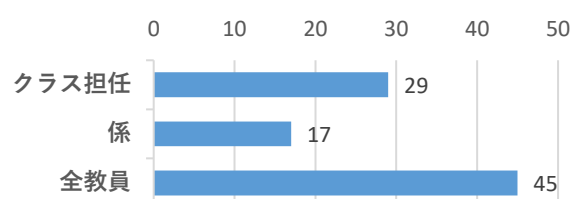
Q1 面接指導の設定回数（1単位につき）（未回答32）



Q2 最低出席時数（1単位につき）（未回答12）



Q3 面接指導担当者（未回答11）

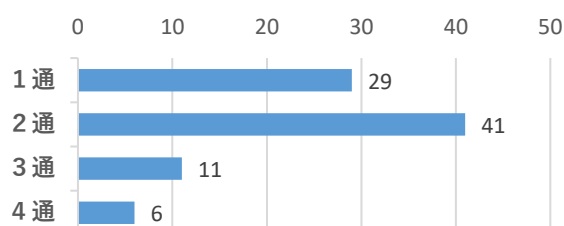


Q4 その他、学習に関する工夫・課題

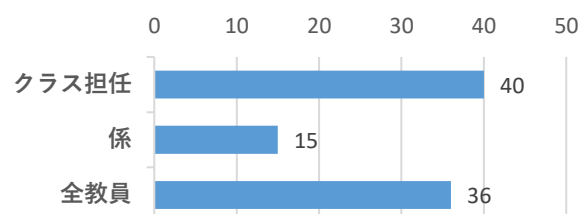
- ・フォトランゲージ、KJ法。（仙台白百合学園）
- ・体験学習、ディベート、調べ学習。（開志学園）
- ・校外学習。（雄峰）
- ・パソコンの貸し出し、図書館の利用。（静岡中央）

V「総合的な探究の時間」の報告課題・添削指導（レポート）

Q1 報告課題の本数（1単位につき）（未回答15）



Q2 添削担当者（未回答11）



Q3 その他、報告課題・添削指導に関する工夫・課題

- ・年度当初に地域巡検を実施して、報告課題を設定。（浜田）
- ・優秀なレポートへの特典。（徳島中央）
- ・興味、得意な点を社会にどのように生かすかに視点を置く。（禅林学園）
- ・放送視聴を位置付けた授業デザインシートの作成。（佐世保中央）

VI その他

Q1「総合的な探究の時間」への変更について

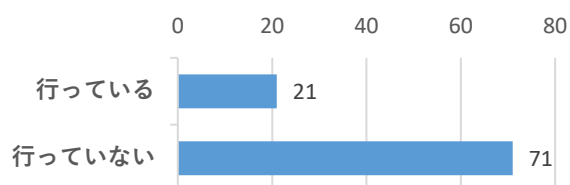
- ・課題設定の方向性を示す。教科・科目における探究活動を全科目で実施する。（美田園）
- ・テーマや研究の仕方等が発展・進化していくように計画する。（高崎）
- ・「仮説」という概念を取り入れる。（新宿山吹）
- ・NHK高校講座の積極的活用と課題設定までの手引きの充実。（NHK学園）
- ・ポスター発表用にまとめて展示する。（浜田）
- ・キャリア教育の視点を取り入れた。（泊）

Q2 研修について

研修（情報共有）を行っている学校は17校であり、まだ少ない。

- ・教育プログラムセミナー「SDGsを通じた探究学習へ」株式会社JTB。（東海大学付属望星）
- ・「探究学習とポートフォリオ解決型セミナー」一般社団法人日本アクティブラーニング協会。（東海大学付属望星）
- ・NHK高校講座を取り入れ、NHKエデュケーションの方とやり取りをしてレポート作成をしている。（延岡青朋）

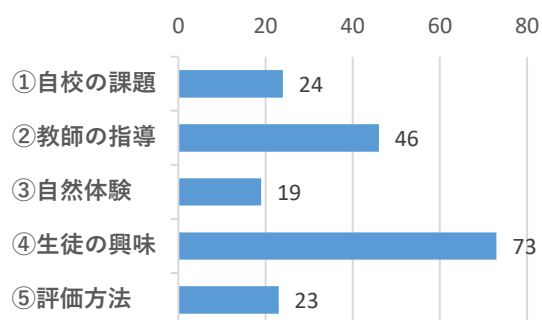
Q3 障害のある生徒などへの配慮について (未回答10)



- ・特別支援コーディネーター、スクールカウンセラー、医療アドバイザーの活用。(松本筑摩)
- ・生徒の状況に個別に対応。
(大津清陵、きのくに青雲、開志学園他多数)
- ・少数での面接指導。(爽風館、八戸中央他多数)
- ・カラーUDの配慮。(鳥取緑風)
- ・パソコンでの解答。(滋慶学園)
- ・身体が不自由な生徒への代替課題の設定。
(横浜修悠館)
- ・担任(チューター)が必要に応じてサポート。
(長尾谷)

Q4 「総合的な探究の時間」の課題(複数回答可)

- ①自校の課題を焦点化したカリキュラムづくり
- ②教師の指導体制、生徒の支援体制
- ③自然体験・社会体験等の体験活動
- ④生徒の興味・関心を高める課題設定と学習の進め方
- ⑤評価方法
- ⑥その他



Q5 「総合的な探究の時間への取組」全般で、情報共有を図る点がありましたら記入してください。

- ・学校教育目標とどのように関連させているか。
- ・評価の観点をどのように設定しているか。
- ・体験的な学習をどのように位置づけているか。
- ・加盟校で気軽に情報交換ができる環境づくり。

4 まとめ

(1) 新学習指導要領の取組報告から

アンケート実施時(令和元年12月)では、約9割の学校が科目研究等を行っており、令和2年度後半の完成を目指している。基礎学力養成と共に、生徒の多様性を考え、科目数を増加させ、必須科目を早い学年におき、生徒の学習意欲が伸長するような選択科目を設置する学校も多くみられる。

移行方法については、年次移行の割合が高く、現教育課程科目も生徒の在籍可能年数に合わせて実施する学校が大半である。また、そのための内部研修や外部講師による研修も積極的に行われており通信制高校へのニーズや意識の高さも感じる。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、面接指導で工夫している点では、34.7%の学校が「ICT機器の活用」と答えている。この新型コロナウイルス感染防止対応で新たな学習システムを構築する中で、ますます必要となる内容である。

このように新学習指導要領での教育課程編成においては、各校が生徒の多様性に十分に対応し、生徒に不利にならないように考えていることがよく理解できる。今後も各校とも、令和4年度に向けて、「教育目標の明確化と社会に開かれた教育課程の編成」、「カリキュラム・マネジメント」への検討、研究が必要とされる。

(2) 総合的な学習の時間の振り返りから

平成18年度との比較による実施状況の変化、改善等について考察する。「中核となる組織」では、平成18年度は学年・委員会・新たな部署が62%、教務部が35%だったのに対し、平成31年度は学年・委員会が28%と減少し、教務部が58%と大幅に増加している。新たな部署や委員会から教務部に移行が進んだものと思われる。

「実施状況」は、①教育課程上の「履修させる期間」では、平成18年度は3年間の32%が、平成31年度は3年間の40%で3年間履修する学校が増加した。積み上げで履修させる学校が増えて

いる事がわかる。②「実施年次」では、平成18年度は1～3年が30%だったのに対し、平成31年度は40%となっており、上記同様に積み上げで履修させる学校の増加を裏付けている。③「学習形態」は、個人が圧倒的に多く、平成18年度は65%、平成31年度は60%になっている。学年単位は、平成18年度は8%、平成31年度は19%に増えている。④「成果発表」については、成果発表実施校が平成18年度、平成31年度ともに36%であった。「発表形式」は、平成18年度が発表会57%、レポート集29%、作品展17%だったが、平成31年度は発表会51%、レポート集38%、作品展22%に変化している。

「ねらい」では、「自己の在り方生き方を考える」が平成18年度の70%から、平成31年度の57%になった。また、「学習活動」では、「横断的総合的な学習」が平成18年度は49%であったが、平成31年度では29%に減っている。「知識や技能の進化・総合化を図る学習」が平成18年度の46%から平成31年度は51%へ、「在り方生き方・進路考察の学習」が同じく40%から46%と増えている。時代の変化で、「ねらい」や「学習活動」が変わってきていることがわかる。

（3）総合的な探究の時間の取組報告から

実施初年度の回答結果である。実施課題として、「生徒の興味・関心を高める課題設定と学習の進め方」が40%、「教師の指導体制、生徒の支援体制」が25%となっている。

また、「研修を行っている」学校は17校である。多岐にわたって、研修を行う必要がある多忙の学校現場では、限られた時間の中で、他の研修の方が優先されているようである。

そして、平素より多様な生徒を抱え、合理的な配慮等の対応を進めている通信制高校であるが、総合的な探究の時間については、「障害のある生徒などへの配慮を行っている」と答えた学校は23%であった。「高等学校学習指導要領 第4章総合的

な探究の時間 第3指導計画の作成と内容の取扱い」では、「（7）障害のある生徒などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと」となっている。

今後、生徒たちに身に付けさせたい力、生徒自らが課題を発見・解決するための効果的な学習方法について、教職員で共通認識をもち、検討する場を作り、組織的に運営することが大切である。

5 おわりに

令和2年度北海道大会第一分科会本部発表にあたり、回答率86.4%と大変多数の学校から調査回答をいただき、各学校に深く感謝申し上げます。また、前年度「全通研・通信制教育あり方研究委員会」の委員によるアンケート作成、集計等の取組の上に、この研究収録があることも申し添える。

教育再生実行会議の第十一次提言（令和元年5月17日）の「2 新時代に対応した教育改革（3）定時制・通信制の在り方」の中で、4点（①多様化する生徒への支援②キャリア教育の推進③生徒の学習状況・定着度の把握（学びの基礎診断の活用）④広域通信制高校の質の確保・向上）、提言がされている。そして、今年は新型コロナウイルス感染拡大防止、休校中の生徒の学習保障、教育のICT化の推進等の対応で各校苦慮しているところである。このように通信制高校においては、多岐にわたって課題が存在するが、この課題を、全通研加盟校で共有・連携し、解決に向けて知恵を出し合い、自校での実践を進めることがこの大会の意義である。アンケートからも「加盟校で気軽に情報交換ができる環境づくり」を求める声が上がっている。

残念ながら全通研北海道大会での発表、研究協議を行うことはできなかったが、この研究収録が、新教育課程の編成、総合的な探究の時間の一層の充実、そして、通信制高校で学びを求めるすべての生徒とそれを支える教職員の一助になれば幸いである。